

## 白雲守端の宗風

岩村 康夫

はじめに

白雲守端禪師は、衡州葛氏に生れ、茶陵郁禪師に依つて剃髮、雲蓋顛禪師に参じた。顛禪師が歿し雲蓋を楊岐方会禪師が継いだのでこれに参じて大悟した。その時の一部始終は『嘉泰普灯録』に次のように記されている。

一日忽ち受業師の誰が為すを問う。云く、茶陵郁和尚。曰く、吾聞く、伊が溪を過ぎて省有り、偈を作り甚だ奇なりと、能く記するや否や。師誦して云く、我に明珠一顆有り、久しく塵勞に閑鎖せ被る、今朝塵尽き光生じ、山河万朵を照破す。岐笑いて趨起す。師愕き視て寐らず、黎明之を咨詢す。適たま歳暮。岐曰く、汝昨日驅雛を打す者を見るや。云く、見る。曰く、汝は一籌渠に及ばず。師復た駭きて云く、意旨如何。曰く、渠は人の笑うを愛す、汝は人の笑うを怕る。師大悟す。<sup>(1)</sup>

守端禪師の大悟の機縁となつた方会禪師の一笑は、守端禪師の法を嗣いだ五祖法演禪師の大悟の機縁となつた「未在」の一語と同じ機能を果たすもので、この大悟に至る経験が、その後における守端禪師の宗風を形成する基盤になつたと云えるであらう。

嘉祐四年（一〇五九）、円通居訥禪師の推挙により江州承天禪院に住した。<sup>(2)</sup>その後、江州円通崇勝禪院・舒州法華山

証道禪院・舒州龍門山乾明禪院・舒州興化禪院・舒州白雲山海會禪院に歴住、五祖法演禪師等を打出し、熙寧五年（一〇七二）四十八歳で遷化した。<sup>83</sup>

守端禪師が住持した六ヶ処の「語録」と、「舒州法華山端和尚頌古一百十則」その他の偈頌等は、『白雲守端禪師広録』全四巻に収録されている。この『広録』で先ず最初に眼を牽くのは、「雪上加霜」の一句である。これは、守端禪師が最初に住持した承天禪院開堂の日、その出世の本旨を吐露した一句である。次に注目されるのは「未在」の一語である。この一語は、守端禪師が常に用い、その法を嗣いだ法演禪師が大悟した機縁の一語である。

本論は、出世の本旨を露す「雪上加霜」の考察を端緒に、常に用いて鉗鎚とした「未在」の考察を通し、もって白雲守端禪師の宗風を明らかにしようとするものである。

### 一、雪上加霜

白雲守端禪師は、最初に住持した江州承天禪院の開堂の日、香を拈じて次のように説いた。

此の一弁の香、且く道え什麼人の為にせん。若し為す所有らば、雪上に霜を加えん。若し為す所無くんば、過つ莫大ならん。<sup>84</sup>

承天禪院に開堂するのは、人の為に何かすることがあり、仏祖の法恩に報いる為であつて、若し何も為す事が無ければ、ここに出世するのは大きな過ちを犯すことになる。ところが、何か為すことがあれば、雪の上に霜を加えるようであると言う。先ず考えられるのは、雪と霜とはよく似ており、雪のみの状態と霜が加わった状態との見分けがつかないが、しかし全く同じではなく微妙な違いがある、ということである。次に挙げる眼横鼻直の垂示は、そのような状況として解される。

従上の諸聖、皆火焰裏に向て出で来りて垂手し、只だ一切の人の眼横鼻直にし去ることを要す。<sup>65)</sup>

仏祖出世の本懐が人々の眼横鼻直にあるならば、何も為す所は無い。全ての人は、元より皆眼横鼻直である故、その上更に眼横鼻直を認識させるのは余計なお世話である。それ故に、雪の上に霜を加えるとは、全てが既に円成しているにも拘らず、何か問題を提起すれば却つて現状に破綻を招くが、敢えて事を起こすと言う意味であろう。例えば、「本と自ら瘡無し。之を傷つくること勿れ。然も是の如きと雖ども、一事に因らざれば、一智を長ぜず。参ぜよ<sup>66)</sup>」という上堂語がこれに当たる。若し人々に問うべき事も求める事も無く、何も望んでいないにも拘らず、彼等の為に何かを施すとすれば、恐らく人々は迷惑がるであろう。このような状況は、雪が積もっている上にさらに霜を加える余計なお節介をする、と言えるであろう。しかし、そのお節介によって人々に智慧が生じるのである。若し、それが飽くまで迷惑なお節介であれば、上堂説法の全てが雪上に霜を加えると言わねばならない。以下、幾つかその例を列挙してみよう。

証道禅院の開堂の日、香を拈じ祝聖し罷り「宗乗は一たび挙げば早くも二三に落つ<sup>67)</sup>」と述べた。宗乗は挙示すると真実そのものではなくなると言う。そうであれば、何も言わず、あるがままにして置くべきである。

また或る日、守端禅師は上堂してしばらく黙した後、「早くも是れ蛇の為に足を画き了る<sup>68)</sup>」と言って座を下りた。上堂も良久も既に宗乗を挙示していて、それが真実のあるがままに不要なものを加えた、と言うのである。ここに「雪上加霜」の意味の一つが、「蛇を描いて足を加える」ことであると明かされた。

承天禅院の開堂の日、祝聖拈香問答し罷り左右を顧視して言った、「便ち恁麼、散じ去れ。自古自今、麻の如く粟に似たり。若し更に如何が若何に有ると言わば、曹溪の一路平沈せん<sup>69)</sup>」と。ここでは、陸座拈香問答顧視の全てが既に曹溪の一路を挙示している故に、最早何も言うべきことはなく、立ち並んで説法を待っている人々に退散するよう指示している。前述の趣旨から言えば、陸座拈香問答顧視の全ては真相に加えられた蛇足であり、二三に落ちた宗乗で

ある。

興化禪院の開堂の日、祝聖白槌し罷つて言った、「便ち恁瑤、散じ去れ。祖焰高く輝き了れり。若し也た未だ然らざれば、高きを平らげ下に就くことを免れず。所以に道く、吾が大聖人の道は、有言に在らず、無言に在らず。有言に關らず、無言に關らず。只だ者箇、赫然として独り耀き、廻かに古今を出で、古今の間に寄り、時に応じて作す」と。白槌のところ既に仏祖の法焰は挙揚され、最早説示する迄もない。その後の説法は、不明の者の為に敢えて蛇足を弄するのである。道は、言語で表現できないが、歴然たる事実であつて虚無ではなく、永遠不変の眞実であると共に、現実に対応して作用している。それ故に、「大道は只だ目前に在るも、要且つ目前は視難し。大道の眞体を識らんと欲すれば、声色言語を離れざれ」と説かれる。

これらの説示より推測されるのは、宗乗・曹溪の一路・大聖人の道・大道と様々に名付けられている事は、我々が直面している現実と離絶していない、ということである。更に、「古路は坦然たるも、行人自ら昧ます。身を移し歩を換え、到る者方に知るべし」とも説いているように、人々は眞実に疎くそれを知らないが、古路は身近に在つて平易であり、自ら経験して知られることなのである。即ち、道は、見難く言い表せないであろうが、声色や言語を超絶せず、直面している現実と隔離せず、各自が自分自身で経験し得る事なのである。

大聖人の道が人々各自自身にあることは、証道禪院の開堂の日、次のように説かれ明らかにされた。

昔日靈山会上、世尊花を拈じ、迦葉微笑す。世尊道く、「吾が正法眼蔵、摩訶大迦葉に分付す」と。次第に流伝し、断絶せしむること無く、今日に至る。大衆、若し是れ正法眼蔵ならば、釈迦老子は自ら分無し。箇の什麼を將て分付し、什麼を將て流伝せん。何ぞ此況の如く謂う。諸人分上に各々自ら正法眼蔵有り。毎日起き来り、是を是とし非を非とし、南を分ち北を分つ種々の施為、尽く是れ正法眼蔵の光影なり。此の眼開く時、乾坤大地、日月星辰、森羅万象、只だ面前に在りて、毫釐の相有るを見ず。此の眼未だ開かざる時、尽く諸人の眼睛裏に在り。

正法眼蔵は、涅槃妙心とも呼び、実相無相の微妙な法門であり、世尊から迦葉へと分付され文字を立せず教外に別伝されたことであつて、一般の人々には縁が無いものと考えられている。ところが、守端禪師は、人々の一切の言動分別が正法眼蔵の用きに因ると言っている。

正法眼蔵は久しく渴仰されて来たが、各自自身が既に所有しているのであれば、全ての人はそのあるがままでよく、その上更に何も加える必要はない。これが宗乗の第一義であるならば、問うものもなく求めるものもなく、説くべきこともなく教えるべきこともない。従つて、若しここで何か問題を提起すれば、問い求める事が有り、知るべき事があり、到るべき目標が有り、あるがままにしておくことはできなくなる。従つて、一たび挙げば早くも二三に落ち、上堂し良久するや早くも蛇の為に足を画き了ると言わねばならない。

しかし、世間の道には苦難が横たわり、人々は時に道を見失うのが現実であり、決して人はそのあるがままに生きているのではない。現実世界の諸相を見て取捨し、それに執し囚われ、自ら苦難を惹起し、安樂の道を見失うのである。それ故に、正法眼を開き、乾坤大地日月星辰森羅万象が面前に在つても、毛筋程もその相を見ず、自らを見失わないようせねばならない。若し、一切が面前に在つても全くその相を見なければ、正法眼は自ずから開くのである。例え未だ開かずとも、正法眼は、誰もが何時でも開くことができるように、人々にとって最も身近な眼睛裏に在るのである。

このように、正法眼の開と未開とは、現実においては相違があり、宗乗においては分別されないものである。更に一步を進めれば、正法眼とは、一切の有無を分別しない眼であると言える。一切の有無を分別しない立場であれば、開と未開とは区別されない。従つて、諸人と仏祖とを区別せず、釈迦老子は自らその分を失うのである。また、物事を分別する眼も、分別しない眼も同一眼の用らきである故に、諸人分上に各々自ら正法眼蔵有り、と言われるのである。

正法眼が未だ開いていなくとも、各々既に正法眼が眼睛裏に在り、しかも日常の言動分別に何の不便もないにも拘らず、殊更にその眼を開かせ、凡聖有無など一切の分別をしない見方ができる眼を得たとしても、どれ程の相違があるのであろう。皮肉な言い方をすれば、未開と開眼とは雪の上に霜を加えた程度の違いであり、願つてもいないのに開眼を強要されるのは、雪が積もるだけでも迷惑している上に霜を加えられるようである、と言わねばならない。

しかし、現実に憂悲苦悩している人々がいる限り、それを見過ごすことができないのが仏祖の慈悲でもあり、また老婆心でもある。このような仏祖の老婆心は、次の一説にもありありとしている。

此の事は、上、諸仏分上に在りて、曾て一毫も増さず、下、一切含生分上に在りても、曾て一毫も減さざるなり。只だ一念の迷妄を為し、覺に背き塵に合し、三途を輪転し、暫くも休息すること無し。遂に我が竺乾の本師を勞し、大解脱海中に於て、強いて玄波を湧し、三乗教外に、人心を直指して見性成仏せしむ。<sup>106</sup>

「此の事」とは、これに先だつて説かれた「問答では得られない」事、「生死の本を起さず、昏醉の郷に沈まず、空亡に落ちず、仏性を顛預せざる」事であり、「天の玄弁を窮め、世の樞機を竭すとも、一点も用著せざる」事であり、ただ否定するより他に言い表せない或る事を指している。

しかし、仏性を顛預せざる事とは、仏性のあるがままのさまを指している故に、此の事は、「仏性」と言い換えることができる。そこで前掲の説法は、次のように解することができる。

仏性は、見性成仏しても増えず、衆生の上まであつても減らない。各自に元より具わり、各自に円成している故である。只だ本来のあるがままを自覚しないばかりに見失い、人々は徒に憂悲苦悩するのである。それ故に、諸仏は大解脱海中に在る人々に強いて解脱を説き、祖師は各自本具の仏性を直指し敢えて見性成仏させるのである。

要するに、仏祖は大解脱海中において強いて解脱を説き、本来仏である人々を敢えて成仏させるのである。これは眼横鼻直の者に眼横鼻直を自覚させることと異ならない。従つて、ここでもまた雪上に霜を加えていると言える。

## 二、全同全別

前節において、雪上に霜を加えるとは、眼横鼻直の者に眼横鼻直を自覚させることであり、大解脱海中において強いて見性成仏させることであると理解された。ここでは、雪と霜とがよく似ているが、微妙に異なるというような意味に取れる。しかし、全く同じであると共に、全く別であるという面も見られる。

このような見方は、正法眼の開いたときの、「乾坤大地日月星辰森羅万象が只だ面前に在りて毫釐の相有るを見ず」という語にも見られた。これは、「一切は有つて無い」と言い換えられるが、このような物事の見方は、一切を分別しない正法眼によるのであって、常識では理解されない。只だ有つて無いと言つても、乾坤大地日月星辰森羅万象が消え失せ虚無に帰するのではなく、依然として一切は一切である。即ち、正法眼が未だ開かない時の一切と、開いた時の一切は、全く同じで全く別である、と言えるのである。全く同じなのは、物事を分別する見方により、全く別なのは、一切を分別しない見方による。

要するに、全同全別という物事を見る眼は、無分別を透過しなければ得られないのである。このような経過は、次の興化禅院の開堂の日の一説にも明示されている。

意は大患と為り、理は大障と為る。直に意理掃尽することを得れば、豁然として便ち是れ本郷なり。…正当恁麼の時、乾坤大地、都て是れ箇の解脱門なり。…放行せんと要すれば、万卉常に春。把定せんと要すれば、大地に塵無し。

意も理も掃尽された処、大地に一塵も無い処は、先に述べた一切の分別をしない立場である。このような処は、非ず非ずと否定する以外に言い表しようがないのであるが、このような立場をここでは、「把定」と言っている。承天禅

院開堂の日「若し不言不語の処に向て会すれば、直に得たり、尽大地、鋒を忘じ舌を結ぶことを。只だ是れ箇の無孔の鉄槌なり。什麼の用処か有らん」と説いたように、そこは尽大地が一箇の無孔の鉄槌のように手の着けようが無く、鋒を忘じ舌を結ぶ不言不語の処である。

しかし、煩惱と菩提を区別せず、迷いと悟りを区別せず、衆生と仏祖を区別せず、悲喜も苦樂も是非も善悪も区別しない寂靜の境地において、そこで見方を一転し森羅万象を見直すと、それらはそのまま円成していることに気が付くのである。それ故に、乾坤大地全てを一箇の解脱門と見なすのである。この時すでに、一切を分別しない立場から一步を譲り、肯定的に無分別の世界を表現する立場に移行している。それを無分別の分別と言うが、それをここでは「放行」と言っている。「万卉常春」という語は、無分別の世界を敢えて分別する見方に立ち、乾坤大地全てが一箇の解脱門と見る境界を言表するものである。即ち、全く同じ世界が、全く別の世界のように見られ、そして言い表されるのである。

尽大地に一塵も無いと見る無差別平等無分別の世界は、無孔の鉄槌に喩えられるが、また一面の雪景色にも喩えられる。乾坤大地が一箇の解脱門であると見る無分別の分別の世界は、永遠の春景色に喩えられる。この無分別から無分別の分別に一転する処は、見色明心聞声悟道と言われるが、次の上堂語に見られるように、守端禪師は、それを雪上加霜と言っている。

上堂し、拄杖を拈起して云く、若し者裏に向て会得すれば、雪上に霜を加えん。若し也た未だ然らずんば、但だ雪の消え去るを得て、自然に春は到来せんと。拄杖を卓して一下す。

雲門文偃が、夾山が唱えた「一塵纔に起せば、大地全く収まる」や「一切色は仏色」を拈起拄杖で、「一切声は仏声」を卓拄杖一下で、「放行」を放下拄杖で直指してより、拄杖は見色明心聞声悟道に導く大切な役割を担うようになり、楊岐方会も盛んに拄杖を用いて宗旨を示した。従って、拈起拄杖を会得することは、見色明心を意味するのである。



守端禪師は、そのような経験を雪上に霜を加えると述べている。

雪上加霜は、蛇に足を加えたと見れば、本来の面目を見失っていた者が眼横鼻直を自覚した意味に取れ、無分別の処に無分別智を加えたとみれば、意理掃尽の処で豁然として本地の風光を省悟した意味にとれる。しかし、雪が消えて春が到来するという語の視点から雪上加霜を見れば、無分別の処に無分別智を加えた意にとるほうが親しいであろう。

このように、無分別智を得れば、拈起された拄杖（一色塵）に山河大地が収まることを悟り、乾坤大地が一箇の解脱門であることを悟るのである。次に挙げる上堂語もこのような禅経験を説示している。

上堂して云く、若し端的に一回汗の出で来るを得れば、也た一茎艸上に向て便ち瓊樓玉殿を現ず。若し未だ端的に一回汗の出るを得ざれば、縦い玉殿瓊樓有れども、却て一茎艸に蓋却せ被る。且く道え作麼生か汗の出で来るを得ん。良久して云く、自ら一双の窮相手有り、曾て容易に三台を舞わず。

実際に見性した者は、冷たい汗が二三日も流れ続けた経験をもち、一切諸法が既に成仏していたことを知り、乾坤大地が一箇の解脱門であったことを悟るのである。見性すると、山川草木は今まで見ていたのと全く同じであり、しかも全く異なるのである。

樂府三台の曲を舞うには、貧乏な踊り手には得られない華美な衣装が要るように、歓喜に満ちた見性は、人にとり憑き大疑団を起し是非善悪凡聖迷悟などの分別を許さぬ貧乏神を払わねば、容易に経験できることではない。ところが一旦見性すれば、その貧乏神が忽ち豊饒の神に変じ、一茎草が本より瓊樓玉殿であったことを悟らせるのである。ここでは徹証された本地の風光が説かれているが、次の上堂語では、本来の自己の徹見が説かれている。

上堂して云く、古人は一言半句を留下す。未だ透らざる時、鉄壁に撞著するに相い似たり。忽然として一日靦得透して後、方に知る、自己自らはれ鉄壁なることを。且く道え、如今作麼生か透らん。乃ち云く、鉄壁鉄壁。

本来の自己は、手脚の著けようがなく攀登り難い鉄壁のように堅固である。未だ本来の自己に目覚めない者は、鉄壁のように先入見を頑として固守する。どうすれば本来の自己を徹見できるか、鉄壁のように手が著けられない問題である。しかし、それらの全てが自らの心性の諸相である故に、僅かな契機で転回する事である。

上堂。良久し、却て大衆を顧視して云く、只だ者箇、能く幾人か跳得出するもの有るや。若し跳不出なれば、爾が知らざると道わず。争奈せん身は影に随つて転ずることを。若し跳得出なれば、早くも知らん、灯は是れ火なること、飯は熟して也た多時なりしことを。参ぜよ。下座す。

未だ者箇を跳出し得ぬ時も、者箇に随つて転身して何の不自由も無い。者箇を跳出し得たとしても、灯が火であることを知り、とつくの昔に飯は炊けていたことを知るのみである。跳不出と跳得出との相違は、灯が火であること知り、飯が米であると知る程度の差なのである。灯や飯は、本来より火や米であつた。即ち、者箇とは、本来のあるがままを指すのである。しかし、これらの事は、証せざれば明らかならず、修せざれば現れない。故に、守端禪師は次のように説く。

上堂して云く、一滴も少くことを得ず、一滴も剩すことを得ず。且く道え什麼人の分上の事ぞ。良久して云く、日日、日は東に上り、夜夜、月は西に流る。

仏性は、見性しても増えず、見性しないままであつても減らず、各自に元より具わり、各々に円成している。日月はあるがままの実相を示し続けている。しかし、それを知らず己に迷い、外に向つて仏を問ひ法を求めらる者にとつて、月日は空しく過ぎるばかりである。故に仏祖は、大解脱海中において見性成仏を説き、雪上に霜を加え続けるのである。

## 三、土上加泥

前述したように、守端禪師は、世尊が花を拈じ迦葉が微笑した時、世尊が正法眼蔵を迦葉に付嘱した故事を挙げ、世尊は何を分付し何を流伝したのか、人々各々が正法眼蔵を既に具有している故、世尊の分が無いと述べている。舒州興化禪院での上堂語では、それを次のように評している。

嗣者の点茶するに因み上堂して云く、拈花付嘱、土上に泥を加う。断臂安心、水中に月を捉う。且く道え、作麼生か此の脉を得て今日に到りても墜ちざる。良久して云く、青山は長飛の勢を鎖ささず。滄海は合に來処の高きことを知るべし。

世尊が迦葉に正法眼蔵を付嘱した故事は、教外別伝を唱える禅宗伝灯の始まりを証するものであるが、肝心の正法眼蔵が人々各自の本具のものであるならば、全く田舎芝居を演じているような恥の上塗りと言わねばならない。従って、伝法嗣法は土の上に泥を加えたに過ぎないと言えるであろう。

二祖慧可禪師が達磨大師に下で開悟した因縁について、守端禪師は「終始心を覺むるに得可き無し、寥々として少林に人を見ず。満庭の旧雪重ねて冷なることを知り、鼻孔依前として上唇に搭る」と頌しているように、二祖の悟りは雪が元々冷たいのに改めてまた冷たいことを知り、鼻の孔は本より唇の上に在るのを以前として鼻が口の上に在ることを知ったのみであると見ている。従って、二祖安心の因縁は、水中の月を捉えたに過ぎないと言えるであろう。

守端禪師は、このように拈花付嘱が土上に泥を加え、断臂安心が水中に月を捉えたとするならば、今も輝く教外別伝の法灯は、どのようにして守られたのであろうか、と自問し、帰郷を願う渡り鳥の行く手を阻む山はない、弘誓の念願を堅固に守るべきであり、海に流れ込む江河の源の高きに思いやり、仏恩の高遠なることを知るべきであると述べている。

この上堂語は、嗣者の点茶するに因むものである故、あるいは法嗣の法演禪師に対する説示であろう。故に、為人度生の誓願と仏祖への報恩を結語に説いたに相違ない。しかし、土上加泥は全く必要のない空しい行為であり、水中捉月は見当はずれの愚かな行為であり、共に敢えて為すまでもない不要な行為を意味している。どこに誓願の重要性があるであろうか。その点について、守端禪師は次のように説いている。

釈迦老子に四弘誓願有り。煩惱無辺誓願断。法門無辺誓願学。衆生無辺誓願度。無上菩提誓願成。法華にも亦た四弘誓願有り。飢え来れば飯を喫せんと要し、寒到れば即ち衣を添え、困ずる時は脚を伸ばして睡り、熱き処では風の吹くを要す。<sup>80)</sup>

空腹になれば食事を取り、寒ければ暖をとり、疲れたならば休息し、暑ければ涼をとる。全く無事安閑たる日常底である。若しこの願いが成就すれば、誰もが大安楽の境地であろう。しかし、このように無事安閑と日常を過ごすことが仏祖の誓願であれば、人々は、問うべき事は何も無く、求むべき事は何も無く、殊更に仏法を学ぶまでもなく、禅道を修するまでもなく、心性を悟る必要もない。それらを学修するまでもなく、誰もが願い成就している事である。このように、空腹になれば食事を取り、寒ければ暖をとり、疲れたならば休息し、暑ければ涼をとることが仏祖の誓願であるなら、確かに拈花付嘱は土上に泥を加えたに過ぎず、断臂安心は水中に月を捉えたに過ぎないと言える。しかし、このような場合、次のような説示とはどのように関わるのであろうか。

有る時は確實に花を生じ、有る時は仏面百醜。李公街頭に酔倒し、是れ自り張公酒を喫す。灯籠眉頭を皺断し、露柱呵々として手を拍つ。<sup>81)</sup>

常識から言えば、石臼に花が咲く事はなく、顔をしかめている仏像はない。張さんが酒を飲んだのに李さんが酔うことは有り得ない。灯籠が眉をひそめ、露柱が笑って手を打つことも決してない。しかし、張さんや李さんは中村さんや鈴木さんと同様、大勢いて頻繁に出会う人であらうし、石臼も仏像も灯籠も露柱も、皆普段に見られる物であ

る。どのように不思議な事のように言われていても、日常生活と離絶した出来事ではないと推測される。日常を離れず、しかも常識を超えていることを、これまで紹介した守端禪師の説示から選ぶのであれば、「一茎艸上に向て便ち瓊樓玉殿を現す」という句が浮かび上がるであろう。この句は、見性の端的を表現するものであり、所謂、無分別智による物事の実相を説くものであった。つまり、日常出会う出来事の正法眼による表現なのであって、何か神秘的な出来事を指しているのではない。

禪録に見られる不思議な言葉は、無分別を説く際の常套手段である。何時までもそこに執着すると、自由を失うことになる。故に、守端禪師は次のように説いている。

上堂して云く、解く無根樹に接し、能く海底に灯を挑ぐるも、未だ是れ衲僧分上の事ならず、且く道え、作麼生か是れ衲僧分上の事。良久して云く、一日に両度、鉢盂湿れる。

無根樹は、無底籃・無孔笛・無弦琴などと同様、一念不生不語不言の者箇を指示する語である。海底に灯を挑ぐるのも、無念無心の大用を述べる常套語である。従って、この上堂語は、無念無心の大用が粥飯の両度に現成している、禅道が日常底に成就していると解される。禅匠のあらゆる言動が現実のあるがままの相の直指であることは、次の説示に明らかである。

上堂して云く、揚眉瞬目、拈槌豎仏、彈指警咳、尽く是れ撓鉤搭索なり。且く道え、海会今日還た過を免るるや也た無きや。乃ち云く、家家觀世音。処処弥陀仏。

揚眉瞬目拈槌豎仏彈指警咳は、誰もが菩薩であり、何処も極楽であることを悟らせる引導の手段である。「家家觀世音、処処弥陀仏」は現実を離れて仏道が有り得ないことを示している。しかし、次の示衆では揚眉瞬目などは引導の手段ではない。

上堂して云く、彈指警咳、揚眉瞬目、是れ這箇にあらざる無し。古人は什麼と為てか却て道う、「万古碧潭空界の

月。再三撈撫して始て応に知るべし」と。会せんと要すや。九九八十一。<sup>88</sup>

ここにおいて守端禪師は、弾指警咳揚眉瞬目は這箇を直指するものであると明言した。這箇とは、把定すれば無分別の処を指し無孔鉄槌などと名付けられ、放行すれば一切のあるがままを指し乾坤大地箇解脱門などと言われる。揚眉瞬目弾指警咳など一機一境は、山河大地を収める故に、一即一切一切即一の理を擁し、把住放行の両意を示している。従って、その一機一境に仏法が円成しており、もはや何も説くべきことはない。それにも拘らず、大安常察禪師は水中の月を再三掬うべきであると言う。一般に水中の月を捉えようとするのは愚かな行為とみなされるが、ここでは、水中の月を捉えれば這箇を会得すると言っている。実際、天空の月を把握することはできないが、手に掬った水に映る月は身近に見られる。どんな僅かな水であろうと、必ず月を映すことができるのである。このように見ると、二祖の断臂安心を水中に月を捉うと評したのは、殆ど苦勞せず簡単に得られる事を、雪中に立ち続け臂を断つてまで求めたのが愚かな行為であるという意味になる。従って、水中の月は弾指警咳揚眉瞬目のような一機一境に現成しているという意味に解されるであろう。

そこで問題になるのは「九九八十一」という語である。古来より、一言一句は一機一境と共に為人度生の撈釣搭索と言われるが、俄かに結論づけることは控え、この語が『雲門広録』によく見られので、その用例より意味を考察して見たい。

一日云く、作麼生か是れ獅子吼。代つて云く、九九八十一。<sup>89</sup>

問う、如何なるか是れ最初の一句。師云く、九九八十一。<sup>90</sup>

問う、如何なるか是れ向上の一路。師云く、九九八十一。<sup>91</sup>

問う、如何なるか是れ途中受用。師云く、七九六十三。<sup>92</sup>

獅子吼は、一切の分別を奪う一喝である。一喝は、仏を問ひ法を求めるところを叱し、既に成就し現に円成している

現成公案底を直指している。即ち、獅子吼には、把住放行の両意が含まれている。従つて、九九八十一という一句は、揚眉瞬目弾指警咳など一機一境と同様、為人度生の撓鈎搭索であると共に、現成公案底を指示し、出発点と最終到達点を同時に示す句であると言える。

公案とは解決せねばならない公共の案件という意であり、現成とは既に成就し現に円成しているという意である。乾坤大地が一箇の解脱門であるということは、仏道における最終目標が、既に成就し現に円成していることを意味する。現成公案底において更に仏法を問ひ悟りをもとめるのは、雪の上に霜を加え、蛇に足を加え、土に泥を加えるような愚かな行為である。故に、守端禪師は次のように言う。

上堂。僧問う、如何なるか是れ仏。師云く、饅湯に冷処無し。如何なるか是れ仏法の大意。師云く、水底に葫蘆を按ず。如何なるか是れ祖師西來の意。師云く、鳥飛び兎走る。乃ち云く、江月照し、松風吹く。者裏に到り、還た網に漏さざる者有りや。良久して云く、皇天に親無し。

仏道は目の当たりに在り、仏法は常に示されている。それは誰彼の区別なく全ての人がそこに在る。それにも拘らず仏を問うは、釜茹の刑を免れないような罪を犯している。更に仏法の大意を問うのは、水中に瓢箪を沈めようとするような愚かな行為である。その上更に祖師西來の意を問うようでは、全く無駄な時間を過ごすことになる。故に、守端禪師は次のように言うのである。

上堂して云く、古の者道く、「上士は道を聞いて勤めて之を行う。中士は道を聞いて存するが如く亡ずるが如し。下士は道を聞いて大いに之を笑う」と。大衆、若し衲僧門下に約せば、却て他の大笑底の些些の骨氣有るを許さん。何ぞ比の如きと謂う。衆眼は謾じ難し。

守端禪師は、「乾坤大地、都て是れ箇の解脱門」と説き、圓悟禪師は、「現成公案。一糸毫も隔てず、普天匝地是れ一箇の大解脱門なり」と説いている。正当恁麼の時、更に問うべきことはない。それ故に、道を聞いて勤めて之を行

う者は道を見失い、道を聞いて大笑する者は道を行くのである。若し、何かを問い求めることが有り、向上の志しがある者は、未だ道に至らないところがあると云わねばならない。

#### 四、白雲未在

白隠慧鶴禪師の八難透と言われる公案の中に、「白雲未在」と呼ばれる古則が有り、現今臨濟禪を学ぶ者は、これによつて白雲守端禪師と出会うことができる。その公案は、白隠禪を学ぶ者が普段用いている『葛藤集』に、次のように記されている。

白雲端禪師、五祖演に語りて曰く、數禪客有りて廬山自り来る。皆悟入の処有り。伊をして説かしむるに亦た得て来由有り。因縁を挙し伊に問えば亦た明め得たり。伊をして下語せしむるに亦た下し得たり。祇だ是れ未在<sup>四</sup>。

白隠下の公案体系では、難透の則に取り組む迄に長い道程があつて「白雲未在」を透過する人は極めて少数であり、室内の機密を漏らすことを恐れ、この公案を透過した人がそれについて論及することは無い。従つて、この公案がどのように参究されているかを知る術がなく、一般の人が守端禪師に出会う機会は無いに等しい。

しかし、守端禪師の「未在」は、彼に嗣法した法演禪師が大悟した機縁の一語であるばかりでなく、守端禪師が修行者の高慢を叩く鉗鎚として常に用いていた語であり、守端禪師の宗風の要と目されるので、白隠下で難透難解と言われている、この公案の考察を避けることはできないのである。

『広録』において、〈未在〉について説かれている上堂語は二則見られる。そこで先ず、考察の端緒に選んだのは、「白雲未在」に類似している次の上堂語である。

上堂して云く、文字一般様、語話一般様、声勢一般、理趣一般。什麼と為てか却つて道う、他は未在と。乃ち云



く、只だ鼻孔大なるが為、頭下を向く。<sup>96</sup>

鼻の孔が大きい為に頭が下に向くという句の意味が判れば守端禪師の趣意を推測し得るのであるが、この上堂語のみではそれを決めることはできない。しかし、「鼻孔大頭垂」という語が他にも見られるので、それを手掛かりにすればその意味を推測することができるであろう。

上堂して云く、去去、実に去らず、途中好し善く為すことを。来來、實に來らず、路上虧危すること莫れ。古人恁麼に道う。法華は然らず。去る時は興に乗って去り、回る時は興に乗って回る。君が与に重ねて叙話せん。鼻孔大きく頭垂る。<sup>97</sup>

去るは向上、回るは向下の意にとり、鼻孔を大きくするのを向上、頭を垂れるのを向下の意と見ると、「鼻孔大頭垂」は「上求菩提、下化衆生」を意味することになる。果たしてどうであろうか。

五祖に到り陞座して云く、昔年暫く憩い、今日重ねて過ぎる。日月は流れの如く、将て二載を経る。且く道え、隔闕せざる底の道理有りや。諸仁者は高く白蓮峰下に宴んじ、病叟は深く法華山中に隠る。相い去ること一日の程なり。作麼生か箇の隔闕せざる底の道理を説かん。夜々仏を抱いて眠る。朝々還た共に起き、起坐鎮に相い随い、身と影の如くに相い似たり。若し恁麼ならば、正に第二頭底を道著し、未だ正定頭底を道著せず。且く道え、作麼生か道わん。乃ち云く、宇宙茫茫として人識らず、依然として鼻孔大きく頭垂る。<sup>98</sup>

病んで法華山中に居る守端禪師と、高く白蓮峰下に宴んじている諸仁者とが全く隔たっていない道理は、朝夜仏と共に起居していることではない。世間の人には全く理解されないが、それに挫けず、鼻の孔を大きくして頭を垂れ続けるところに道理がある。菩薩が衆生の病を病むように、守端禪師もまた世間の人の為に病み、五祖山で修行している人々も鼻の孔を大きくして、やがて人の為に頭を垂れるのである。

このように、鼻孔を本来の面目の意に、垂頭を為人度生の意とすると、文字、語話、声勢、理趣の全てに亘って遺

漏が無くとも（未在）と言うのは、鼻の孔を大きくして人の為になる人物を鍛練する鉗錘を振るつていと解される。あるいは、（未在）と言うのは、自らの悟りに安住し、悟りに執われ、悟りを著る人の高慢の鼻を折る鉄槌で、それによつて風通しのよい大きな孔の鼻にする為であろう。

それでは、鼻の孔の大きい人は、人々の為にな何をするのか、どのようになることを願うのか、そもそも鼻の孔が大きくなるとはどのような事なのか、と問わねばならない。この問いには、次の上堂語がそれを答えているであろう。

上堂して云く、尋常に爾らに向つて道く、未在と。也た別の意無し。只だ是れ諸人が喫粥喫飯せんことを要す。

須く是れ自家の匙を拈り筋を放ち便ち飽を得るべし。若し別人の弁を取れば、只だ是れ虚飽なるのみ。臘月三十日、一場の乾嚙唾を贏得せん。然も是の如きと雖ども、口をして忘却せしむること莫れ。

守端禪師が「未在」と言うのは、各自が各自自身の匙や箸を用いて粥飯を喫するよう願う故である。前に、空腹になれば食事を取り、寒ければ暖を取り、疲れたならば休息し、暑ければ涼をとる、これが守端禪師の誓願であると説いたのと異ならない。また、一切の人の眼横鼻直にし去るを要する諸仏出世の本懐と同一であると言える。ただ、未在を透過する以前と以後の鼻は同一であっても、鼻の孔が大きくなったところに相違がある。

自分の箸を使わず他人に食べさせて貰う場合があつても、誰も他人の口で食事をとる者はいない。故に、元より具備している口があれば、喫粥喫飯に際し何も不便なことはない。ただ、自分自身の箸を持たず、他人に食べさせてもらう人々が有るのを見兼ねて、未在未在と鉗錘を下すのである。

この「未在」という一語が機縁となり、実際に大悟したのは法演禪師である。そこに至る経過とその消息は、『嘉泰普灯録』に次のように記載されている。

五祖法演禪師、浮山円鑑禪師に謁す。…一日謂いて曰く、子の来るや何ぞ晚し、吾れ老いたり。虚しく子が光陰を度るを恐る。往いて白雲に依る可し。此老は後生にして吾れ未だ面を識らずと雖ど、但だ渠が臨濟三頓棒の話を

頌するを見るに、人に過ぐる処有り。必ず能く子が大事を了せんと。師澹然と礼して辞す。

白雲に至り、遂に僧南泉に摩尼珠を問う話を挙げて請問す。雲之を叱し、師領悟す。投機の偈を献じて曰く、山前一片の閑田地、又手丁寧に祖翁に問う。幾度か売り来り還た自ら買う。為に憐れみ、松竹清風を引くと。雲特に印可し磨事を掌らしむ。

未だ幾ばくならずして雲至り師に語りて曰く、爾一件の事を知るや。云く、知らず。曰く、近日教禅客有りて廬山より来る。皆悟入の処有り。伊をして説かしむれば亦た説き得て来由有り。因縁を挙し伊に問えば亦た明め得たり。伊をして下語せずむれば亦た下し得たり。只だ是れ未在なりと。

師聞いて愕眙して曰く、既に悟了し、説も亦た説得し明も亦た明得す。如何が却って未在なると。狐疑すること七日、忽ち偃息し洞然と昭徹して曰く、元來恁麼地。其の胸中に珍惜するのみと。此に到りて尽し去り、走りて白雲に見ゆ。雲、為に手舞い足踏む。師は亦た一笑するのみ。<sup>55</sup>

ここで注目すべきことは、法演禪師が二度悟ったことである。最初は南泉摩尼珠の話を請問し、守端禪師に叱せられて領悟した時。この際投機の偈を作り、守端禪師もこれを印可した故、その悟りを疑う余地はない。二度目は未在の一語で七日も疑い、「元來恁麼地、其の胸中に珍惜するのみ」と昭徹した時である。禪師が胸中に珍惜していたものは、最初の〈領悟〉であったことは明らかであるが、この記事のみでは「元來恁麼地」の意味を特定できない。

二度目の悟りについて『五灯会元』には、「忽然として省悟し、従前の宝惜一時に放下す。走りて白雲に見ゆ。雲、手舞足踏を為す。師亦一笑するのみ。師後に曰く、吾茲に因り、一身白汗を出し、便ち下載の清風を明らかめ得たり」と記している。ここで一時に放下した宝惜は、従前の〈領悟〉であることは言うまでもない。それを放下し、「下載の清風」を明らかめ得たと言っているのは、先に言う〈恁麼地〉とは、一切を放下した清々しい境地を指していると思われる。

『古尊宿語録』の「仏眼和尚語録」には、「忽然として中夜に方に会得し、従前の宝惜一時に放下す。遂に端師翁に白す。師翁起ち来り、手舞い足踏む。先師（五祖法演）此の因縁を奉して某（仏眼清遠）に謂て曰く、参学は須く是れ一時に放下して方に安樂を得べし」と記している。この記述によれば、〈恁麼地〉とは、一切を放下し何も失うものない大安樂の境地を指している。

如来藏裏の摩尼珠の話により、本来の鼻孔を領悟した法演禪師は、未在の一語により省悟し、更に鼻の孔が大きくなつた。今後は頭を下に向け、人々が下載の清風を感じし、大安樂の境地に到ることを願うのみである。

しかし、到つてみればその境地は元來恁麼であつた故、何も増えず何も減らず、本来具有の鼻孔を更に拡げたのみである。従つて、この〈未在〉の一語の爲し得たことは、雪上に霜を加えたに過ぎないと言わねばならない。

### むすび

白雲守端禪師の宗旨は、①諸人分上に各々自ら正法眼蔵有り、②此の事は、上諸仏分上に在りて曾て一毫も増さず、下一切含生分上に在りても曾て一毫も減ぜず、③乾坤大地都て是れ箇の解脱門なり、の三句に集約される。世尊が迦葉尊者に分付し、連綿と伝えられたと言われる正法眼蔵は、既に誰もが具有し全ての人に円成しているのである。仏祖は、何も伝えるべきものも無く、何も説くべきことも無い。人々が願つた解脱は、現に成就しているのである。人はもはや問うべきものも無く、求めるべきことも無い。

それ故に、守端禪師は、最初に住持した江州承天禪院の開堂の日に、何か人に為すことが有れば雪上に霜を加えることになり、何も無いと言え、仏祖の法恩に背くことになると説いたのである。この〈雪の上に霜を加える〉という守端禪師開堂の本旨は、〈只だ一切の人の眼横鼻直にし去ることを要する〉仏祖の出世垂手の本懐や、〈大解脱海中

に於て強いて玄波を湧す。世尊や、元より具備円成しているにも拘らず、(三乗の教の外に、人心を直指して見性成仏せしむ) 祖師の本意と異なるものではない。

しかし、(雪上加霜) という守端禪師の本旨は、その一言一句に反映して自ずからその宗風を形成し、上堂説法を(蛇の為に足を画く)、拈花付嘱を(土上に泥を加う)、断臂安心を(水中に月を捉う)と説き、(飢え来れば飯を喫せんと要し、寒到れば即ち衣を添え、困ずる時は脚を伸ばして睡り、熱き処では風の吹くを要する)を守端禪師の四弘誓願とする処に顕著に見られた。

その中でも、尋常用いた(未在)の一語は、一旦の(領悟)を一時に放下し、(只だ自ら匙を拈り筋を放ち喫粥喫飯し飽を得る)ことを目指す鉗鎚として用いられたもので、正しく(雪上加霜)の本旨を現成する格好の手段であり、守端禪師の宗風を直指するものである。

それ故に、若し白雲守端禪師の宗風を識得したいと欲すれば、只だこの(未在)に参すべきである。守端禪師云く、「王令已に行われ、即ち海晏河清なり。且く道え、海晏河清の一句作麼生か道わん。野老は知らず堯舜の力を、鑿鑿として鼓を打ち江神を祭る」と。仏祖の誓願を知らず覚らずとも平穩無事に過ごす者に、(未在)と説く罪は莫大である。しかし、仏祖の法恩に背いて悟らず説かざる過ちも莫大である。守端禪師は言う、「珊瑚枕上兩行の涙、半ばは是れ君を思い、半ばは君を恨む」と。これ即ち守端禪師の(未在)の一語に込められた真情であり、宗風の真意である。

## 〔注〕

- (1) 楊岐方会禪師法嗣舒州白雲守端禪師、衡陽人族葛氏<sup>①</sup>(統灯云周氏非)。幼事翰墨惡俗務。冠依茶陵郁禪師披削。往參雲蓋顛禪師<sup>②</sup>。顛歿楊岐繼焉。岐見之与語終夕。一日忽問受業師為誰。云、茶陵郁和尚。曰、吾聞、伊過溪有省、作偈甚奇、能記否。師誦云、我有明珠一顆、久被塵勞閹鎖、今朝塵尽光生、照破山河万朵<sup>③</sup>。岐笑趨起。師愕視不寐、黎明咨詢之。適歲暮。岐曰、汝見昨日打驅儼者麼。云、見。曰、汝一籌不及渠。師復駭云、意旨如何。曰、渠愛人笑、汝怕人笑。師大悟。巾侍久之。嘉祐四年辞游廬阜。円通訥禪師一見自謂不及。举住承天。声名籍甚。又遜居円通。次法華龍門興化海会。至所衆如雲集。(中略)熙寧五年遷化寿四十八。<sup>④</sup>
- 〔嘉泰普灯録〕卷四(乙二・乙十・四七b)
- ① 〔建中靖国統灯録〕周氏。〔禪林僧宝伝〕葛氏(或云周氏)。〔聯灯会要〕周氏。〔五灯会元〕葛氏。
- ② 〔禪林僧宝伝〕剃髮年二十餘。
- ③ 〔禪林僧宝伝〕參顛禪師(或鶻禪師)

④ 〔禪林僧宝伝〕我有神珠一顆、日夜被塵羈鎖(或云常被塵勞羈鎖)、今朝塵尽光生、照破青山万朵。

〔聯灯会要〕我有神珠一顆、久被塵勞閹鎖、今朝塵尽光生、照破山河万朵。

〔五灯会元〕我有明珠一顆、久被塵勞閹鎖、今朝塵尽光生、照破山河万朵。

⑤ 〔禪林僧宝伝〕夜狐。〔聯灯会要〕夜胡。〔五灯会元〕驅儼。

⑥ 〔禪林僧宝伝〕円通訥禪師見之自以為不及。举住江州承天。名声爆耀。又讓円通以居而自处東堂。端時年二十八。

⑦ 〔五灯会元〕熙寧五年遷化寿四十八。

(2) 注(1) ⑥ 参照

(3) 注(1) ⑦ 参照

(4) 師(江州承天禪院)開堂日。陞座拈香云。此一弁香。奉為今上皇帝。伏願。堯風永扇。舜日遐明。…又拈香云。此一弁香。且道為什麼人。若有所為。雪上加霜。若無所為。過莫大焉。…師乃顧視左右云。便恁麼散去。自古自今。如麻似粟。若言更有如何若何。曹溪一路平。

沈。所以從上諸聖。皆向火焰裏。出來垂手。只要一個人。眼橫鼻直去。今日衆中。有大家垂手者麼。出來看。

(問答略) 乃云。問話且止。問之与答。俱是贏得辺事。

古者道。動則起生死之本。靜則沈昏醉之鄉。動靜双泯則落空亡。動靜双收則顯預仏性。到者裡。直得窮天玄弁。竭世樞機。用一点不著。独有山僧。今日幸遇太平世界。得路便行。不懼他人笑怪。所以道。此事上在諸仏分上。不曾增一毫。下在一切含生分上。不曾減一毫。

只為一念迷妄。背覺合塵。輪轉三途。暫無休息。遂勞我竺乾本師。於大解脱海中。強湧玄波。三乘教外。直指人心。見性成仏。且道今日如許多葛藤。阿那裏是直指処。若向長老口裏覓。大似貪觀天上月。忘却室中灯。若向不言不語処会。直得尽大地。忘鋒結舌。只是箇無孔鉄槌。有什麼用処。到者裏。還有知音者麼。良久云。只見白雲飛散尽。不知明月落誰。

【白雲守端禪師広録】卷一 (Z二・二五・二〇〇d)

(5) 【同前】卷一 (二〇〇d)、注(4)参照

(6) 上堂。本自無瘡。勿傷之也。然雖如是。不因一事。不長一智。參。【同前】卷一 (二〇三d)

(7) (舒州法華山証道禪院) 開堂日。拈香祝聖罷。乃云。

宗乘一舉。早落二三。古路坦然。行人自昧。移身換步。

到者方知。今日還有到者麼。試出來看。(問答略) 師乃

云。昔日靈山会上。世尊拈花。迦葉微笑。世尊道。吾正法眼藏。分付摩訶大迦葉。次第流伝。無令斷絶。至于今日。大衆。若是正法眼藏。釈迦老子自無分。將箇什麼分付。將什麼流伝。何謂如此。況諸人分上。各々自有正法眼藏。每日起来。是是非非。分南分北。種々施為。尽是正法眼藏之光影。此眼開時。乾坤大地。日月星辰。森羅万象。只在面前。不見有毫釐之相。此眼未開時。尽在諸人眼睛裏。今日已開者。不在此限。有未開者。山僧不惜手。為諸人開此法眼藏看。乃举手豎兩指云。看看。若見得去。事同一家。若也未然。山僧不免重說偈言。諸人法眼藏。千聖莫能當。為君通一線。光輝滿大唐。須彌走入海。六月降嚴霜。法華雖恁麼道。無句得商量。大衆。既滿口道了。為什麼却無句得商量。乃喝一喝云。分身兩処看。

【同前】卷一 (二〇五b)

(8) 上堂。良久云。早是為蛇画足了也。下座。

【同前】卷一（二〇六c）

(9) 【同前】卷一（二〇〇d）、注(4)参照

(10) 師（舒州興化禪院）開堂日。祝聖白槌罷。乃云。便恁

麼散去。祖焰高輝了也。若也未然。不免平高就下。所

以道。吾大聖人之道。不在有言。不在無言。不闕有言。

不闕無言。只者箇。赫然独耀。迥出古今。寄古今間。

応時而作。今日還有知時之士麼。出来與興化相見。（問

答略）師乃云。達磨大師。初来此土時。未有人相委。

於少林寺。端然宴坐。凡經九年。一日二祖立雪齊腰。

達磨曰。汝当何来。二祖云。請師安心。達磨曰。汝将

心来。為汝安心。二祖良久对曰。覓心了不可得。達磨

曰。与汝安心竟。大衆且道。什麼处是達磨為二祖安心

处。若言覓心了不可得。無一法可当情处。是為他安心

处。祇如恁麼道底消息。從什麼处来。若言恁麼道底。

是為他安心处。不見道。意為大患。理為大障。直得意

理掃尽。豁然便是本郷。山僧有頌云。終始覓心無可得。

寥寥不見少林人。滿庭旧雪重知冷。鼻孔依前搭上唇。

正当恁麼時。乾坤大地。都是箇解脱門。积迎老子。向

者裏無措手分。一大藏教。祇下得箇注脚。然後移身換

步。応物投機。却能流出一大藏教。所以道。善言言者。

言所不能言。善跡跡者。跡所不能跡。要放行也。万卉

常春。要把定也。大地無塵。然雖如是。未称衲僧家風。

且道如何是衲僧家風。良久云。千峰勢到岳辺止。万派

声歸海上消。

【白雲守端禪師広録】卷二（乙二・二五・二〇九c）

(11) 上堂云。大道只在目前。要且目前難覩。欲識大道真體。

不離声色言語。拈起拄杖云。者箇是拄杖子。阿那箇是

大道真體。将箇什麼識想。爾者一隊漆桶。臘月三十日。

只認得驢鞍橋。作阿爺下頷。乃喝云。去。

【同前】卷二（二一四c）

(12) 【同前】卷一（二〇五b）注(7)参照

(13) 【同前】卷一（二〇五b）注(7)参照

(14) 【同前】卷一（二〇〇d）注(4)参照

(15) 【同前】卷一（二〇〇d）注(4)参照

(16) 【同前】卷一（二〇〇d）注(4)参照

(17) 【同前】卷一（二〇〇d）注(4)参照

(18) 【同前】卷一（二〇五b）注(7)参照

(19) 【同前】卷二（二〇九c）注(10)参照



(20) 【同前】卷一 (二〇〇d) 注(4)参照

(21) 上堂。拈起拄杖云。若向者裏會得。雪上加霜。若也未然但得雪消去。自然春到來。卓拄杖一下。

【同前】卷一 (二〇二d)

(22) 洛浦和尚云。一塵纔起大地全收。一毛頭師子全身總是爾。【雲門匡真禪師広録】卷上 (丁四七・五四七a)

(23) 師有時拈拄杖打床一下云。一切声是仏声。一切色是仏色。爾把鉢盂啗飯時有箇鉢盂見。行時有箇行見。坐時有箇坐見。者般底作与麼去就。把棒一時趁散。

【雲門広録】卷中 (丁四七・五五五c)

(24) 【雲門広録】卷中 (丁四七・五五五c) 参照注(23)

(25) 上堂云。若端的得一回汗出来。也向一茎艸上便現瓊樓玉殿。若未端的得一回汗出。縱有玉殿瓊樓。却被一茎艸蓋却。且道作麼生得汗出去。良久云。自有一双窮相手。不曾容易舞三台。

【白雲守端禪師広録】卷二 (Z二・二五・二一一d)

(26) 上堂云。古人留下一言半句。未透時。撞著鉄壁相似。

忽然一日覩得透後。方知自己自是鉄壁。且道如今作麼生透。乃云。鉄壁鉄壁。【同前】卷二 (二一一b)

(27) 上堂。良久。却顧視大衆云。只者箇。能有幾人跳得出。

若跳不出。不道爾不知。争奈身随影転。若跳得出。早知灯是火。飯熟也多時。參。下座。

【同前】卷一 (二〇四b)

(28) 上堂云。少一滴不得。剩一滴不得。且道什麼人分上事。良久云。日日日東上。夜夜月西流。

【同前】卷二 (二一四d)

(29) 因嗣者点茶上堂云。拈花付囑。土上加泥。断臂安心。水中捉月。且道作麼生得此脉。到今日不墜。良久云。青山不鎖長飛勢。滄海合知來処高。

【同前】卷二 (二一〇a)

(30) 【同前】卷二 (二〇九c)、注(10)参照

(31) 上堂云。釈迦老子有四弘誓願。煩惱無边誓願断。法門無边誓願学。衆生無边誓願度。無上菩提誓願成。法華亦有四弘誓願。飢來要喫飯。寒到即添衣。因時伸脚睡。熱処要風吹。

【同前】卷一 (二〇六a)

(32) 上堂云。有時碓觜生花。有時仏面百醜。李公醉倒街頭。

自是張公喫酒。灯籠斲断眉頭。露柱呵々拍手。

【同前】卷一 (二〇八d)

(33) 『同前』卷二(二一一d)、注(25)参照

(34) 上堂云。解接無根樹。能挑海底灯。未是衲僧分上事。

且道。作麼生是衲僧分上事。良久云。一日兩度鉢盂湿。

『同前』卷一(二〇六a)

(35) 上堂云。揚眉瞬目。拈槌豎拄。彈指警咳。尽是撓鈎搭

索。且道。海会今日還免過也無。乃云。家家觀世音。

処処弥陀仏。

『同前』卷二(二一一b)

(36) 上堂云。彈指警咳。揚眉瞬目。無不是這箇。古人爲什

麼却道。万古碧潭空界月。再三撈摑始応知。要会麼。

九九八十八。

『同前』卷二(二一二b)

(37) 一日云。有所說野干鳴。無所說師子吼。我与麼是野干

鳴。作麼生是獅子吼。代云。九九八十一。

『雲門匡真禪師広録』卷中(T四七・五六七a)

(38) 問如何是最初一句。師云。九九八十一。

『雲門匡真禪師広録』卷上(T四七・五六六c)

(39) 問如何是向上一路。師云。九九八十一。

『雲門匡真禪師広録』卷上(T四七・五四五c)

(40) 問如何是途中受用。師云。七九六十三。

『雲門匡真禪師広録』卷上(T四七・五四九c)

(41) 上堂。僧問。如何是仏。師云鏝湯無冷処。如何是仏法

大意。師云水底按葫蘆。如何是祖師西來意。師云鳥飛

兔走。乃云。江月照松風吹。到者裏。還有不漏網者麼。

良久云。皇天無親。

『白雲守端禪師広録』卷一(Z二・二五・二〇四c)

(42) 上堂云。古者道。上土聞道勤而行之。中土聞道。如存

如亡。下土聞道。大笑之。大衆。若約衲僧門下。却許

他大笑底。有些些骨氣。何謂如比。衆難難護。

『同前』卷一(二〇二b)

(43) 『同前』卷二(二〇九c)、注(10)参照

(44) 現成公案。不隔一毫毫。普天匝地。是一箇大解脫門。

『圓悟仏果禪師語録』卷十二(T五七・七六九a)

(45) 白雲端禪師語五祖演曰。有教禪客自廬山來。有皆悟入

処。教伊說亦得有來由。拳因縁問伊亦明得。教伊下語

亦下得。祇是未在。

『葛藤集』卷下

(46) 上堂云。文字一般様。語話一般様。聲勢一般。理趣一

般。爲什麼却道。他未在。乃云。只爲鼻孔大頭向下。

『白雲守端禪師広録』卷二(Z二・二五・二一四d)

(47) 上堂云。去去実不去。途中好善爲。来来実不来。路上

莫虧危。古人恁麼道。法華即不然。去時乘興去。回時乘興回。与君重叙話。鼻孔大頭垂。

【同前】卷一（二〇七c）

(48)到五祖陸座云。昔年暫憩。今日重過。日月如流。將經二載。且道。不隔閣底有道理。諸仁者。高宴白蓮峰下。病叟深隱法華山中。相去一日程。作麼生說箇隔閣底道理。夜々抱仏眠。朝々還共起。起坐鎮相隨。如身影相似。若恁麼。正道著第二頭底。末道著正定頭底。且道作麼生道。乃云。宇宙茫茫人不知。依然鼻孔大頭垂。

【同前】卷一（二〇七d）

(49)上堂云。尋常向爾道未在。也無別意。只是要諸人喫粥喫飯。須是自家拈匙放筋便得飽。若取別人弁。只是虛飽。臘月三十日。贏得一場乾嚙唾。然雖如是。莫教忘却口。

【同前】卷一（二一〇b）

(50)白雲守端禪師法嗣五祖法演禪師。：謁浮山円鑑禪師。鑑舉如來有密語迦葉不覆藏令究之及期。一日謂曰。子來何晚吾老矣。恐虚度子光陰。可往依白雲。此老雖後生吾未識面。但見渠頌臨濟三頓棒話。有過人处。必能了子大事。師潸然礼辞。至白雲遂舉僧問南泉摩尼珠話

請問。雲叱之。師領悟。献投機偈曰。山前一片閑田地。叉手丁寧問祖翁。幾度壳來還自買。為憐松竹引清風。雲特印可令掌磨事。未幾雲至語師曰。爾知一件事麼。云不知。曰近日有数禅客。自廬山來。皆有悟入处。教伊說亦說得有来由。举因緣問伊亦明得。教伊下語亦下得。只是未在。師聞愕眙曰。既悟了說亦說得。明亦明得。如何却未在。狐疑七日。忽偃息洞然昭徹曰。元來恁麼地。其胸中珍惜。到此尽去走見白雲。雲為手舞足踏。師亦一笑而已。

【嘉泰普灯録】卷八（乙二・乙十・六七c）

(51)未幾雲至語師曰。有数禅客。自廬山來。皆有悟入处。教伊說亦說得有来由。举因緣問伊亦明得。教伊下語亦下得。祇是未在。師於是大疑私自計曰。既悟了說亦說得。明亦明得。如何却未在。遂參究累日。忽然省悟。從前宝惜一時放下。走見白雲。雲為手舞足踏。師亦一笑而已。師後曰。吾因茲一身出白汗。便明得下載清風。

【五灯会元】卷十九（乙二・乙十・三六五b）

(52)上堂。举先師在白雲会中作磨頭。一日端師翁下来曰。爾還知一件事麼。先師曰。不知。師翁曰。近有数禅客。

自廬山來。問他皆有悟入處。教伊說亦說得有來由。拳因緣向伊亦明得。教下語亦下得。端師翁良久謂先師曰。磨頭祇是未在。爾道如何。先師聞了心下不安。得七日七夜。不成腸肚。正中心下。乃自思惟曰。既悟了說亦說得。明亦明得。如何却未在。忽然中夜方會得。從前宝惜一時放下。遂白端師翁。師翁起來。手舞足踏。某曾侍奉先師。聞先師拳此因緣謂某曰。參學須是一時放下方得安樂。大衆。還見得否。放得下好洒脫。放不下牛曳杷。堪笑諸方老古錐。打鼓說禪無尾杷。無尾杷不驚怕。不驚怕可嗟呀。解踏毘盧頂上行。不言亦自伝天下。好大哥。

【古尊宿語錄】卷二九「仏眼和尚語錄」(Z 2・23・二六九d)

(53) 上堂。举僧報趙州和尚。大王來看和尚。趙州云。大王万福。僧云。大王未來。趙州云。又道大王來也。其僧罔措。師云。其僧雖然罔措。争奈王令已行。王令已行。即海晏河清。且道海晏河清一句作麼生道。野老不知堯舜力。鑿鑿打鼓祭江神。

【白雲守端禪師広録】卷二(Z 2・二五・二一四a)

(54) 上堂。衆集定。乃云。大衆會麼。以04杖卓一下云。珊瑚枕上兩行淚。半是思君半恨君。下座。

【同前】卷一(二〇三b)